

令和6年度投稿

俳句

(四月)

行く春や 旅の宴の 月日貝

(維新 竹東子)

城山に 若葉の香り 鳥の声

(城山 竹東子)

仙巖園 景色も 負けぬ 春の雨

(仙巖園 猫髭収集家)

春日傘 ここが見事と 桜島

(仙巖園 倖悦)

春雨の 向かふに 噴煙 桜島

(城山 月城花)

東風に 吹かれ 足重くなり 雨宿り

(仙巖園 ななもん)

こいのぼり そよそよおよぐ さくらじま

(城山 匿名)

階段を 登った先に お昼だ「ドーン！」

(城山 ワルはるちゃん)

桜島 心支える よりどころ

(城山 まるっちのママ)

城山の 頂上まだか ソーダ水

(城山 川上町の成さん娘)

白煙に 雲の峰めく 桜島

(城山 恵美子)

(五月)

初夏薩摩 俳句作りに 耽る妻

(仙巖園 遊び心お島津)

夏の海 水面に聳える 桜島

(仙巖園 g t)

子らの声 はこぶ薫風 桜島

(城山 粥川 貴斗)

火山より 返る「やつほー」 こいのぼる

(城山 ペえ)

鹿児島町の 町を見下ろす 展望台

(城山 猫仁)

大鳥居 霧島神宮 青もみじ

(城山 和ちゃん)

新緑に 白くたなびく 桜島

(城山 和ちゃん)

噴く山を 眺めて一夜 春の旅

(城山 鷹野美恵子)

(六月)

仙巖園 雨に濡れる 松の影

(仙巖園 Yuma)

積む石に 祖先と今の 思慕重ね

(仙巖園 濱田千夏)

かごんまの 心地の良さに 太鼓判

(仙巖園 ごりさ)

(七月)

城山展望台 不用花錢坐渡輪 看得到櫻島

(城山 周)

老の身に 順路涼しき 島津邸

(仙巖園 原田まゆみ)

カラス鳴く 夕暮れどきの 城山や

(城山 なかのなこ)

（八月）

暑いねと 目が合ったのは 桜島

（城山 じょん）

汗かいた 汗かいたたら 汗かいた

（仙巖園 ののかちゃん）

蝉の声 届け響かす 南風

（仙巖園 だしまきしょ

うだい）

城山に 涼風来たす 桜島

（城山 十河雷 らい）

（九月）

赤蜻蛉 留まる愛の 丸十字

（仙巖園 星行）

法師蝉 のべつ幕なし 丸十字

（仙巖園 星行）

嵐去り 望むは青と 桜島

（仙巖園 犬も旅すれば

台風にあたる)

さくらじま なつよのおわりに ふんかな

(城山 すずみ)

木々しげる 山より見える 都の反映

(城山 棚からぼたもち)

(十月)

鹿児島は 歴史がいっぱい つまってる

(南洲公園 串町 隼)

せんがんの 巖となりて 密柑なる

(仙巖園

オサール生はるおき)

桜島 煙り流すや 女郎花

(維新館 原浩朗)

秋高し 坂上の雲 桜島

(南洲公園 兎鍋居士)

てっぺんに 冬靄かぶる 桜島

(城山 永田千春)

桜島 中心に据え 松手入

(仙巖園 筒井美智恵)

桜島 歴史を包む 雄大さ

(城山 やまさち)

西郷どんの たぎる思いは この地から

(城山 やまさち)

(十一月)

菊の香を まとふ身体と してめぐる

(仙巖園 児島 豊)

秋空を 花も彩る 菊まつり

(仙巖園 濱崎雅人)

さざなみが 遠く聞こえる 砂湯かな

(城山 ねお)

近頃の 夜のおかずは さくらじま

(城山 パセリ帝国)

秋風に 頬を赤らめ 桜島

(城山 はるたん44歳)

(十二月)

桜島 薄煙色 ほとばしる

(仙巖園 外山誠)

碑の跡に潮風染み入る 赤紅葉

(仙巖園 中垣内たいが)

穏やかな島のたなびき 冬至かな

(城山 なおこ)

陽が沈む 開聞岳と われみたり

(維新 タムセン)

もくもくと 今日も今日とて 桜島

(仙巖園 けんちゃん)

火山灰 積もり積もって 桜島

(仙巖園 けんちゃん)

大晦日 鐘と噴火が 鳴り響く

(城山 ジェンシー)

いい景色 冬の運動 あったまる

(城山 カーヴィ大好きマン)

桜島 思い出多き 紅葉の宴

(仙巖園 前田俊範)

(一月)

感謝せよ お前を推すのは この俺だ

友人と 綺麗な夜景 寒空に

(城山 むうか)

本当は 女の子と 来たかった

(城山 けい)

白い息 お前もそうか 寒いのか

(城山 比嘉さん)

年明けに来たよ めでたい薩摩富士

(城山 あみちゃぼん)

この年で 初訪問の 仙巖園

(城山 ちなボン)

座学より 心に刺さる 仙巖園

(仙巖園 もんちゃん)

聞く学び よく深く知る 仙巖園

(仙巖園 もんちゃん)

島津家へ より感謝ます 初訪問

(仙巖園 もんちゃん)

(二月)

桜島 薄化粧して 春を待つ

(仙巖園 もんちゃん)

桜島 春のはごろも 巖かに

(城山 無記名)

渋滞の 静けさ雪の 桜島

(城山 レイナ)

ジャズと雪 薩摩の朝日 向こう岸

(城山 無記名)

太古より 守りし大地の 奇跡かな

(維新 やんびん)

冬空の 夕日に染まる 桜島

(城山 観光課の佐々木)

水面には 光る島津の 意思きらり

(城山 みーあー)

かすみあり 猫と城山 ほのかな寒気さ

(仙巖園 みさかわちい)

川柳

(四月)

わからずや 母を背にして いざゆかん

(城山 トマト)

(五月)

父の案 母は一喝 ぎをいうな

(仙巖園 遊び心お島津)

玉こめて 西洋（てき）に備えし 島津兵

（仙巖園 思春期の47歳）

仙巖園 歴史見守る 桜島

（仙巖園 g t）

闇の中 頭に浮かべる 桜島

（城山 べえ）

西郷どんも 愛した景色 我もまた

（城山 和ちゃん）

（六月）

白む空 見果てる先の 桜島

（城山 h a t a）

分からずも 歴史感じる 赤い傘

（仙巖園 ごりき）

（七月）

通り雨 遠路の姉と 桜島

（仙巖園 さとう一徳）

雲の傘 被り晴れ待つ 桜島

真夏日に　よう来なさつたと　桜島

(城山　はら)

(八月)

城山の　桜島映ゆる　展望台

(城山　あづみコーチ)

(城山　しゅんぴょん)

薩摩まで　来てよかったな　さつま揚げ

(仙巖園　だしまき

しょうだい)

旧友と　夜景眺める　呑みのあと

(城山　ウミゴイ)

(九月)

御本殿　木の香映えるや　鶴屏風

(仙巖園　星行)

両棒餅　タレをぬぐいて　汗拭う

(維新　さっちゃん)

さくらじま　きみとのま　あつというま

(城山　まりちゃん)

ドンファンと　ここで出会った　ドン広場

（城山）

薩摩の西郷ドンファン）

雨降れど　がっかりするな　島津雨

（城山　みやしろ）

目の前の　噴火で学んだ　不屈の心

（城山　みやしろ）

元気でね　名残り惜しくて　薩摩旅

（城山　みやしろ）

鹿児島の　アイスうまうま　よだれジュル

（城山　棚からぼたもち）

（十月）

成り明くる　堕ちては聞くぞ　斉彬

（仙巖園）

オサール生はるおき）

鹿児島の地　振り返れば父　旅の終わり

（仙巖園　もっさん）

霧の中　雨に濡れつつ　働きぬ

(仙巖園 王新媛)

(十一月)

錦江湾 湾をワンと 呼ぶ我がお嫁

(仙巖園)

延岡からきました)

麦生田の ゴーカート対決 負け運転

(城山 ねお)

(十二月)

年末は こたつに入るより 仙巖園

(城山 前田俊範)

向き合うは 孤独寂しさと 桜島

(仙巖園 馬來西亞りょう)

「おかえり」と 磯背に 燃ゆる 桜島

(仙巖園 KenAyu)

山の上 煙たなびき 桜島

(仙巖園 山崎優悟)

ヤッホーと 城下に響く 子の声よ

(一月)

星の上 君と僕との 宝物

(城山 からあげ)

長渕が また来てくれる ヨーソロー

(城山 むうか)

桜島 明日行くから 待っててな

(城山 あみちゃぼん)

灰が降り そして輝く ウルトラ土壌 (ソイル)

(城山 ちなボン)

フーガ聴き 噴水見ながら 噴火山

(城山 ほしの)

より深く 島津家を知り より好きに

(城山 うさちゃん楽団)

近代の 薩摩はやっぱり 意識高い

(仙巖園 もんちゃん)

(二月)

砂湯をね 砂湯と読んで 大笑い

(仙巖園 がまだせりゆうきゆう)

につぽんの 冬桜島 夕焼けに

(維新 レイナ)

(城山 みーあー)

桜島 上がるは雲か 噴煙か

(城山 ばなみ)

短歌

（五月）

曇天も 揃えて歩く 父と子の

仙巖浴びる 未来への光

（仙巖園 なつまいも）

仙巖園 島津の歴史に 入り浸る

我に返すは 電車の足音

（仙巖園 g t）

上野でも 目立つ存在 西郷どん

遠路江戸でも 足跡見ゆる

（維新 金太郎）

霧島を 背景にして 横切った

路面電車と 汽笛鳴る船

（仙巖園 白鳥007）

桜島 幼き祖母に 寄り添いし

いま我孫と見 世代を超ゆる

（仙巖園 おじょう）

（六月）

袖引いて 桜島望む 子供の声

望遠鏡の 百円ねだる

（城山 林堂）

（八月）

先人の 知恵と努力と志
今まで繋ぐ 史跡訪ねる

（仙巖園 だしまき

しょうだい）

望遠鏡 一〇〇円払うは許されず
スマホカメラで 8倍ズーム

（城山 十河雷 らい）

（九月）

桜島 ベンチ腰掛け さつま揚げ
オマケが増える 人情街よ

（城山 福岡にもおいで）

秋日の 展望台より 漏れ出る
夕の焼け跡 島照らす

（城山 棚からぼたもち）

（十月）

目頭を 湿らすあの日の はやり歌
会いたいよおと 叫ぶ城山

（城山 開明子）

瓦屋根 鳴りゆく響き 令和にて

煎餅かじる 子は別荘にて

(仙巖園

オサール生はるおき)

(十一月)

日の本に ○○富士は 数あれど

秀麗一は 薩摩富士なり

(仙巖園 濱崎雅人)

秋空に 噴煙上げて 佇むは

菊を纏いし 桜島なり

(仙巖園 濱崎雅人)

二分咲きの 黄色菊に 形取られ

満開を待つ 三重の塔

(仙巖園

加治木の浜ちゃん)

西郷(せご) どんの 息吹感じる 終焉地

夕日輝く 桜島の秋

(城山 三輪尋子)

いつまでも 上手くならない 自撮り

雲と一緒に ボヤけた桜島

(城山 字余り足らず)

(十二月)

仙巖園 団体様に まぎれては

説明聞いて お勉強

(仙巖園 前田俊範)

軽石と スコリア 積もりし 城山は

勇士の命も また積もりしか

(城山 沢渡憂作)

亡き母の 心の故郷 桜島

昔も今も 変わらぬ姿

(仙巖園 利恵の娘)

(一月)

大自然 からの恵みを 受け取って

大根食べて お腹いっぱい

(城山 あみちやぽん)

西郷ドンも きつと見ていた 風景を

拝んで始まる 令和七年

(城山 ちなボン)

せんがんの 蠟梅青き 桜島

人皆優しい 二重丸かな

(仙巖園 しんしん)

過去を知り より良き時間を 過ぎしけり

来た甲斐ありと 広めるなり

(仙巖園 もんちゃん)

(二月)

城山や 我が恋心 冬晴れに

静かに華やぎ そつと揺蕩う

(城山 NAOTO)

天高く そびえる桜 穴深く

蒼き美空も 染める白雲

(城山 抹茶飴)

怒っても 逆らえないと 気付く時

ここらでよかと 隆盛は言う

(城山 宮原昴也)

